

**主 題：あなたへの祝福を忘れない3 一世に対する勝利②—**  
**聖書箇所：ヨハネの手紙第一 1章1-5節**

今朝も I ヨハネ 5 章をお開きください。私は本当に救われているのか——。使徒ヨハネはこの大切な質問に対する答えを記してくれています。時代や場所を越えてあらゆるキリスト者が救いの確信を持つことがこの手紙を記した目的でした。I ヨハネ 5：13に「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのはあなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」と、この手紙が記された理由が記されています。この I ヨハネを学ぶことによって、信仰の有無、その真実を我々は明確にすることができます。本当に救われているのか、そうでないのかです。私たちが願うことは、もしご自分の救いに疑問を抱いておられる方がいるとすれば、きょうの学びを通して、その疑問を払拭していただきたいということです。もしこの学びを通して、私は間違いなく救われていると確信をお持ちになったとしたら、この後神の前に感謝を持って従い続けて行かれることです。もし自分の救いに関して、救われていないのだということが明確になったとすれば、きょうその救いにあずかっていたきたいと心から願います。既に私たちはこの5章の学びを始めて、本当のキリスト者たちは一体何を信じているのか、また信じた者たちがどういった特徴を持っているのかを見てきました。

**A. 信じる内容 1節**

5：1で「イエスがキリストであると信じる者は」と、一体何を信じることによって救いにあずかるのか、本当のキリスト者たちは一体何を信じているのかを見てきました。

**B. 神の子どもの特徴：本当に救われた者たちの三つの証拠**

その後、救われている者たち、神の子どもたちの特徴の中の二つを見てきました。

**1. 「信じ続ける」 1節**

救われている人というのはどんな時でもイエスを信じ続けていく者たちである。

**2. 「愛し続ける」 1節**

二つ目に、信仰者というのはどんな時にも愛し続ける者たちであるということを見ました。

**1) 「神を愛する」**

私たちの神を愛し続ける存在である。

**2) 「兄弟姉妹を愛する」**

私たちの兄弟姉妹を愛し続ける者たちであるということを見てきました。確かにこの「神を愛する」とか「兄弟姉妹を愛する」ということは大変難しいということを我々はよく知っています。イエス・キリストを信じる前も我々は人を愛しましょうと思ったとしてもなかなかそれはかないませんでした。私たち人間にとって一番難しいことの一つは人を愛すること、また人を許すことだと思いませんか？ではどうすれば私たちが人を愛し続けることができるのか、神を愛し続けることができるのかをヨハネは私たちに教えてくれました。それは、救いにあずかることによってそれが可能になるということです。神の恵みによってこの救いにあずかり、新しく生まれ変わった人は、主イエス・キリストが愛されたように父なる神を愛する、また兄弟姉妹を愛する者に生まれ変わったというのです。

**(1) 神の子どもたちを愛していることがどのようにしてわかるのか 2節**

2節「私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。」を見ると、神の子どもの特徴をより詳細にヨハネは説明してくれています。ヨハネは、私たちが神の子どもたち、兄弟姉妹を愛しているかどうかをどのようにしてわかるのかを教えようとします。それは私たちが神を愛して、その命令を守るかによってであると、二つのことを挙げています。

**① 神をアガパオの愛で愛しているかどうか 2節**

彼が言いたいことは、神の子どもたち、兄弟姉妹たちを神の愛で愛しているかどうかはわかるのは、今も少し触れましたけれども、まず一番目に神をアガパオの愛で愛しているかどうかです。神様を神の愛で愛しているかどうかによってはっきりすると、こうしてヨハネは神に対する愛と兄弟姉妹たちに対する愛、この二つは絶対に切り離せないものだと言っているのです。神を愛することなしに、兄弟姉妹たちを愛することは不可能だし、兄弟姉妹たちを愛することなしに神を愛することはできないと。神だけを愛して兄弟姉妹を憎んだり、兄弟姉妹たちを愛して神を憎むということはあり得ないということ

ヨハネは私たちに教え続けようとするのです。ですから兄弟姉妹たちを愛しているかどうか、どうしてわかるかということ、あなたが神を愛しているかどうか、しかもアガパオの愛、神の愛をもって愛しているかどうかです。

## ② 神の命令を守っているかどうか 2節

二つ目に彼が言っていることは神の命令を守っているかどうかです。2節に「その命令を守るなら」と書いてあります。兄弟姉妹を愛しているかどうかというのは、あなたが神の命令を守っているかどうかによってわかるのです。

こうして見ると、神を愛すること、兄弟姉妹を愛すること、そして神の命令を守ること、この三つのことは非常に関連していることがわかります。実はヨハネが教えたかったのは、この三つこそが神の子どもとして生まれ変わった特徴であり、まさにこの三つこそが本当のクリスチャンたちの特徴だということです。神を愛する者たち、兄弟姉妹を愛する者たち、そして神の命令を守り続ける者たちと。

## 3. 「神の命令を守り続ける」 2 a 節

きょう私たちは三つ目の特徴である神の命令を守り続けるということについて、2節のところから一緒に見ていきたいと思います。

### 1) 神の愛が持つ力：行動を生み出す

「私たちが神を愛してその命令を守るなら、」と記されています。注目していただきたいことはどうしてヨハネは神を愛することと神の命令を守ることを並んで記したのかです。その理由を知ることは非常に大切なことです。ぜひ皆さんも考えていただきたい。ヨハネがこのように記したのには理由があります。ヨハネはキリスト者に与えられた神の愛が持つ力を教えようとするのです。前回も見てきたように私たちクリスチャンには神の愛が与えられた。だからその愛をもって愛することが可能になったのです。ヨハネはあなたに与えられた神の愛がどんな力を持ったものか、どれほど偉大な力を持っているのかを教えてください。なぜならこの神の愛と神の命令を守ることを見ると、神の命令を守るというのは行動、行いの話です。実は彼は神の愛がこのような行動を生み出して行くのだと言うのです。神の愛には必ず行動が伴うのです。行動をもたらずのです。その力があるということをヨハネは教えようとします。

それはこの神様の愛というのは生きておられる神の愛だからです。私たちの神は死んで墓の中におられる神ではありません。この方は死から敢然とよみがえって今も生きておられる。ですからこの愛も同じように生きています。恐らく多くのクリスチャンが覚えている聖書箇所の一つにヨハネ3：16に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」とあります。神の愛というのはただのことばだけではなく、「世を愛された」のです。どんなふうにかということ、「ひとり子をお与えになったほどに」と。つまり神の愛というのは、イエス・キリストをあなたや私のためにこの地上に送ってくださった、その行為でもって明らかにされました。神が私やあなたのことを愛してくださっているかどうかを疑う時に、私たちが見るべきはイエス様の十字架です。イエス・キリストがこのように人として来てくださった。十字架で死んでくださり、よみがえられた。これは私たちにこの方が、つまり神があなたを愛してくださっていることを明らかにします。つまり、神の愛というのはそこに行いが伴っているということです。だからその神の愛をいただいたあなたの中に行動が生まれてくる、行いが生まれてくるのは当然のことだと思いませんか？

### ◎ 私たちは神の愛をいただいている

Iヨハネ4：19には「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」とあります。まずここに「愛しています」ということばが2回出てきます。どちらも同じアガパオ、神の愛というギリシャ語が使われています。ところがこの二つの動詞は時制が違います。最初の「愛しています」というのは現在形です。継続して「愛しています」と。「私たちは」と一人称複数ですから、「私たちは愛し」続けていますと。次に出てくる「愛してくださった」というのは不定過去という時制を使っています。もう実際に起こった過去の話です。しかもここに形容詞の「まず」というのがついています。これは「前」や「先の」という意味のあることばです。つまり時間的に前だと言っているのです。何よりも前かということ、今あなたは愛し続けるという新しい歩みをしているけれども、その歩みの前の話だと言っているのです。ではその前に何が起こったのかということ、あなたが愛されたのです。つまりあなたが愛されているということがわかって神の愛をいただいた時に、あなたは新しく生まれ変わってその愛をもって愛し続ける人へと変えられたということです。なぜあなたが神を愛し続けるのか、なぜあなたが兄弟姉妹を愛し続けるのか、それはあなたが神の愛をいただいたからだと。ここでこういう時制を使い分けることによってそのメッセージをヨハネは私たちに届けてくれるのです。そうすると、神を愛することも可能になった。兄弟姉妹たちを愛することも可能になった。なぜならば生きて働かれる神の

愛が私たちに与えられ、あなたにそれが与えられた。主イエス・キリストが父なる神を愛し、私たちが愛してくださった、その愛をいただいたゆえに私たちも同じように愛する者として歩むことが可能になったのです。

## 2) 神の愛が持つ力：神への従順を生み出す 3節

再びこのことを5：3でヨハネは繰り返します。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」、2節にも「命令を守るなら」と、日本語で同じように「守る」ということばが出ています。2節で使われている「守る」ということばと3節に出てくる「守る」ということばは異なることばが使われています。2節で使われているのは、「従う」とか「行う」とか「行動する」という意味のことばです。つまり彼が言いたいことは、神が与えてくださった愛は神を愛するという行動を生み出すだけではなくて、神の命令に従っていこうという行動を生み出すのだということです。そして3節の「守る」ということばは「見張る」とか「監視する」、「教えや律法などを守る」、「遵守する」という意味のあることばです。2節でヨハネが教えたかったのは、神の愛は行いを生み出して行くという働きをするのだということです。3節では、神を愛するというのは神の命令を守ることだ、つまり神を愛している人たちはただ何となく神様に従おうというのではなく、神様の言われていることをよく観察し、それを正しく知り、そしてそれを行っていこうとすることです。不従順にならないようにその教えを注意深く扱い守っていくと云うのです。2節では行いが生まれ、3節ではその人は神様の命令をしっかりと正しく受け止めて、それを守り行い続けていくために、それを忘れてしまわない。神の命令だからそれにふさわしく扱う人。だからこのメッセージが私たちに言うことは、神を愛しているがゆえに、神に喜ばれたいという願いがあるゆえに、神のメッセージを常に心に刻んでおこうと。だから神のことを愛しているのです。なぜなら神の命令を遵守したい、神の命令に忠実に従っていききたいというのはクリスチャンである人たちの特徴です。なぜなら、その生き方こそが神に喜ばれる生き方だからです。

### ① 神様のメッセージ：サウロとサムエル Iサムエル15：22-23

もう一度言います。神様に喜ばれる生き方とは神の命令に従うことです。ちょうどサウロ王様とサムエルとのやり取りを思い出します。サウロはイスラエルの初代王様ですが、神はサウロに人間だけではなく動物に至るまでアマレク人すべてを聖絶しなさいという命令を与えました。ところが、サウルはその命令に従わず、家畜の中で傷のないものだけを残しました。それを問われた時に彼は、いや、あれは神に捧げるために取っておいたのですと言い訳します。その時にサムエルが主のメッセージをサウルに伝えました。これはIサムエル15：22に「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」と出てきます。これは神のメッセージです、クリアで明確なメッセージが伝えられています。神が望んでいるのは、何をするかではない。あなたが心から神を愛して神の命令に従うかどうかです。次の23節で「まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。」と語っています。どうしたら神を喜ばせることができるのかというと、神の命令に従うことです。そしてもう既に見てきたように、神の命令に従うことは可能なのです。

### ② イエス様の教え ヨハネ14：15、21、23

神様の命令に従っていこう、神の教えに服従していこう、それというのはまさにあなたが神を愛していることの証拠であるとイエス様ご自身がそのことを教えておられます。ヨハネ14：15に「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」とイエス様は言われました。だからイエス様を愛しているか愛していないかというのは、イエス様ご自身の戒めを守るかどうかにかかっていると主ご自身がそう言っています。同じヨハネ14：21でも「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。」とあります。イエス様が言いたかったことはもうはっきりしています。同じヨハネ14：23にも「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。」と言っています。つまり旧約のみことばも新約のみことばも同じことを私たちに伝えていきます。

サムエルが言ったことは神が一番お喜びになるのは、神の御声に聞き従うことであり、新約にあってイエス様が言われたことは神のことばに聞き従うことであると。時代は違えど同じ神が同じメッセージを語っておられるのです。主への服従、神の命令を守り続けること、神のことばである聖書の教えに従い続けること、そのような願いを持っている人、そのように生きていきたいという願いを持っている人。なぜならそのような願いを持っていても残念ながら完璧に生きていく人はいないでしょう。失敗だらけです。でもそのような願いを持っているということは、あなたの中に神の愛が与えられているからです。神の愛をいただいた人はそのように生きていきたいと思うのです。まとめるとこうなります。あなたに与えられた神の愛が神への愛を生み出して行くのです。そして神への愛が神への従順を生み出して行くのです。神の愛というのはそのような力を持ったものだと言うのです。

### ③ パウロの教え II テモテ 2 : 4、使徒 20 : 24

パウロは主がお喜びになる従順の人生について兵士の例えを用いて教えています。多分皆さんもお聞きになったことがあると思います。II テモテ 2 : 4 ですが「兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」とあります。兵士となった以上、これまでの日常生活の諸々のことは全部忘れて、ある一つのことにフォーカスを当てるのです。自分の上官たちを喜ばせることです。そのために兵士は生きるのです。まさにそれこそが我々救いにあずかったクリスチャンたちの新しい生き方だと言うのです。そしてパウロはそのように生きたのです。パウロは主のみこころに服従するという人生を全うした人物です。彼はこう言っています。「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、使徒 20 : 24 です。つまりこの証が私たちに教えてくれるのは、パウロはもう自分のために生きていなかった。自分のことなどどうでもよかった。彼が考えていたのは、どうしたら神を喜ばせることができるのか、それは神がこうなさい、このように生きなさいと言われた、その命令に忠実に従うことであると。サムエルがサウルに語ったメッセージを実践したのはパウロです。イエス様がお話になったことを実際に実践したのはパウロです。

そしてそれとともに世界じゅうに数え切れないほどの信仰の勇者たちが皆同じようにして生きたはずです。信仰の勇者たちは神がこのように生きなさいと言われたことに忠実に従って生きた者たちです。そして間違いなく、神はそのような人々を喜ばれた。なぜなら神を愛していたのです。神はそのような人たちのことを喜ばれた。ですから、もしあなたが神に喜ばれたいと願っているなら、神のみことば、神の命令に従うことです。

そして、きょうのテキスト 3 節には「神を愛するとは、神の命令を守ること」だと書いてあります。決して神の教えから外れてしまわないように、神のメッセージを真剣に大切に受け取って、それに従っていこうとする。そういう歩みに関してヨハネは「その命令は重荷とはなりません」と言います。恐らくそれをお聞きになった時に、実は私にとってそれは「重荷」なのですよと言う方がおられると思います。神が言われること、神が命じておられることを忠実に従っていこうとすることは、私にとって大変「重荷」です。というのはこのことばは、「難儀なこと」です。つまり「難しいこと」や「容易ではないこと」、「苦しむこと」、「悩むこと」、「煩わしいこと」です。自分にとってこれは苦しみですとか、自分にとってこれは悩みですとか、余りにも難し過ぎます。それは「重荷」なのです。しかし、ヨハネが言うように、神の命令に従っていくことは実は全然「重荷」ではない、全然苦ではない、難儀なことではない。なぜかという、このように歩んで行こうとするその動機が神への愛だからです。神を愛しているからです。私の家の近くに障害者の施設があったので、よく障害者を乗せたバスが止まっていた。子どもながらに何も親に質問しませんでした。見ているだけであることがわかりました。それは、その母親たちの自分の子どもたちに対する愛です。きっと普通よりも手がかかるのだろうし、大変なのだろうと思います。でもだれひとりとして、いやいや、義務感でやっているようには見えませんでした。彼らはみんな自分の子どもたちを愛していたからです。だれかを愛している時って、どんな犠牲を強いられたとしてもそれは自分たちの喜びになりませんか？喜んでその犠牲を払おうとする。周りから見ているとどうしてそこまでと言うかもしれない。でもその人たちにしてみたら彼らを愛するから喜んでそれをしようとする。愛ってそういうものでしょう？神を愛している人たちというのは、何とかして神に喜んでいただきたいと思っているから、神がこうなさいと言われたことを喜んでやっけて行こうとするのです。だから「重荷」ではないと言うのです。神を喜ばせているならば、私たちも喜んでいられるからです。だから彼らはみことばに従っていこうとする、なぜなら神を愛しているからです。

神の愛をいただいたすべてのクリスチャンたちが何の抵抗もなく神に逆らい続けることができるなんてあり得ない話です。神様の愛をいただいたすべてのクリスチャンたちが何の抵抗もなく神に逆らい続けていくなんて、そんなことはあり得ません。確かにみこころであるとわかっていながら、それに逆らってしまったことも、またみこころでないと知りながらそれを選択してしまったことも残念ながら私たちの人生にたくさんあります。しかし神に逆らった時でも、神に背いた時でも、主に対する愛は消えてはいなかったはずだし、主を喜ばせたいという願いは消えていなかったはず。だから神の愛をいただいた、本当に救われた者たちというのはその罪から神に立ち返っていかうとします。皆さんもその時に神の前に悔い改めをしてきたはず。だから新しく生まれ変わった者たち、救われた人々、その人たちが神の愛を持って歩んでいる、それはまさにその人たちが救いにあずかっている証だ。もし何の抵抗もなく悔い改めることもなく、継続して神のみことばに逆らい続けているとするならば、恐らくその人には神の愛が与えられていないのでしょう。

なぜかというイエスはヨハネ14：24で「わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。」と言っています。そしてIヨハネ3：10には「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。」とあります。我々はどちらかに属しているのです。中間はありません。あなたは神の子どもなのか、悪魔の子どもなのかどちらかです。ヨハネはここで悪魔の子どもの特徴を教えてください。「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と。兄弟姉妹たちのことを嫌いになってしまうような人は救われていなかったのかということ、そんなことを言っているではありません。継続してです。もし誰かがクリスチャンと言われている兄弟姉妹に対してずっと憎しみを抱き続けている。そうだとしたら考えなければいけない。もちろん私たちは罪深い存在ですから、すべての人を同じように愛せるかということ、愛することができないのも事実です。でも神の前に正しくないことを行ったら、それは正しくないということを内住する聖霊は私たちに確実に教えてくださる。だから悔い改めようとするのです。間違っているという思いを持つのです。サタンの子どもたちというのはそういう思いを持たないのです。良心の呵責はあるかもしれない。ああ、こんなことをしてこの人に害を及ぼしてしまって申しわけなかったなと思うかもしれない。でも決して神の前に悔い改めようとしなさい。サタンの子どもたちというのは罪を継続して犯し続けているのです。そういうふう生きる、それが習慣的になされているのです。でも神の子どもたちはどうかということ、失敗は犯しますし、神のみこころに反することもあります。でもその人たちの心の中には、神の愛があるゆえにそれが神への愛を生み出し、そして神に従っていきこうとする。ゆえに彼らは喜んで兄弟姉妹たちを愛そうとしている。少なくともそう願っている。

### 3) 神の命令に従うための二つの鍵

きょうのテキストに戻って、ヨハネは私たちに神が求めておられるこの服従の生活、神の命令に従っていくという生き方、これが実践できるのだと言います。あなたも神様の命令に従って生きていくことができると言うのです。ではどうしたらいいのか、ヨハネは私たちに二つの鍵を教えてください。

#### (1) 神への愛

一つ目の鍵はもう見てきました。神への愛です。神を愛する人たちは神の命令に従っていきこうとする。ですから少なくとも私たちの祈りの中に「神よ、あなたをもっともっと愛する者に変えて行ってください」、そういう祈りが必要です。私たちは神の助けをいただきながら、より神を愛する者へと変えられていくように。なぜならこの神への愛が、神のみことばに喜んで従っていききたい、そういった生き方を生み出していくからです。

#### (2) 世に対する勝利 4-5節

二つ目の鍵は世に対する勝利がそれを可能にしてくれると言うのです。4-5節「なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」とあります、今この2節の中で「世に勝つ」ということばが繰り返されていました。この「世に勝つ」という動詞が何度も出てきています。実はこのことばは新約聖書の中に28回出てきています。その中でヨハネが24回使っています。ヨハネの福音者の中で1回、ヨハネの手紙の中で6回、あとは全部黙示録です。というのは黙示録の中でヨハネがしたかったのは、クリスチャンたちを励ますことでした。あなたたちは勝利したのだと彼らを励ましていた。ですから黙示録の中にこのことばは17回出てきています。

この「世に勝つ」ということばは、4-5節に3回出ていました。4節のところに「世に勝つから」だと。そして「世に打ち勝った」と出てきて、5節に「世に勝つ者」と。3回出てきているのですが、4節の初めの「世に勝つ」ということばと5節の「世に勝つ」は時制が同じ現在形です。ところが4節の後半に出てくる「世に打ち勝った」というのは不定過去が使われています。既に起こった出来事だと言うのです。つまり、ヨハネはこの読者たちが日々の生活を通してさまざまな誘惑に対して勝利して行く、その日々の生活における勝利を話しているのですが、この4節の後半のところである特別なことに対する勝利を扱っていることは明らかです。

#### ① 惑わしに対する勝利

それは何の話かということ、ヨハネ自身がそのことを我々に教えてください。Iヨハネ4：2を見ると「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。」とあります。「反キリスト」が今来ていると。2000年前に既に存在していたという話です。ではこの人たちは何をしたのかということ、いろいろな迫害もあったでしょうけれども、この人たちがした一番大きなことは教会の中に

偽りの教えを持ち込んだことです。それが書いてあります。2節「人となって来たイエス・キリストを告白する霊は」とあります。3節に「イエスを告白しない霊は」と、この二つを対比しています。クリスチャンたちは「人となって来たイエス・キリストを告白」しています。クリスチャンでない者たちは「イエスを告白しない」と言うのです。

しかも見ていただきたいのは、2節「人となって来たイエス・キリスト」と書いてあります。ここでもしる前置詞を使っています。誰か人のうちに入っていったということを表す前置詞ではなくて人の中にと、英語で言えば“in”とinto”の違いですが、あえてここでヨハネが“in”という前置詞を使っているのは、イエス・キリストがだれか人間のからだを支配したような、その人に乗り移ったかのようなことを言っているのではないのです。イエス・キリストが人として来たことを言っているのです。もしだれかのうちに入ったとしたら、その時は、“in”ではなくて“into”を使うのです。でも“in”という前置詞を使うことによってイエス・キリストはだれかに入ったのではない。イエスは人としてこの世に来たということ。ですからこの箇所私たちが理解できることは、この世に入り込んで来た、ヨハネの時代にいた異端たちはイエスが人であることを否定していたのです。だからヨハネはイエスが人だということを明確にしたのです。

どんな異端が存在していたのかというと、グノーシス主義です。初代教会から大体紀元3世紀ぐらいまで、教会に悪影響を及ぼした教えです。時間の関係で詳しく説明できませんが、彼らはどんな考えを持っていたかということ、物質はすべて本質的に悪であって、霊は本質的に善であると。だから神が物質を持って、つまりからだを持ってこの世に来るということはあり得ない。聖い神が悪であるからだを持ってこの世に来るということはあり得ないと。そういう教えから彼らはイエスが人となられたということ否定したのです。こういったグノーシス主義というのは、プラトンやギリシャの哲学者たちによって教えられるようになってきているのです。イエスが人となられたということ彼らは否定した。そういうにせ教師たちが出てきたのです。こういう人々の影響をいろいろな人たちが受けるのです。大体紀元85年ぐらいにはケリントスという人物がキリスト仮現論というものをします。どんな教えかということ、イエスの肉体はそうに見えただけであって、本物の肉体ではなかったと。グノーシスとよく似ています。つまり彼らに共通していたことは、イエスが人間のからだを持ってこの地上に来たということあり得ないということ教えたことです。

そこでヨハネは、4：2に「人となって来た」、イエスは完全に人としてこの世にお生まれになったのだと教え、彼らの過ちを明らかにし、同時に兄弟姉妹たちを励ましたのです。イエス・キリストは完全に人としてこの世にお見えになった救世主であると。ですから、先ほど見た4章に「人となって来た」と記されています。

そして5：1に「イエスがキリストであると信じる者」と、5：5に「イエスを神の御子と信じる者」と、なぜこんなことを繰り返しているかということ、ヨハネはイエスが一体だれなのかということ改めて読者たちに教えていくのです。イエスは人となられた神であり、イエスは人となられた救世主であり、イエスは神の御子だと。わずかこれだけの間にイエス論というか、イエスについての教理がいっぱい書かれているのです。こうしてヨハネはイエスに関して間違った教えをもたらずこのにせ教師たちに惑わされないようにとして、このようにイエスがだれなのかを繰り返し教え続けたのです。そしてこの読者たちは、このような間違った教えに惑わされることがなかった。だから彼らは勝利したのです。それがこの5：4で「世に打ち勝った勝利」だと。そういう惑わしに対してあなたたちは負けずに打ち勝ったのだとしてヨハネはここで記したのです。

## ② 世に対する勝利 4、5節

問題は、4節の初めのところと5節の初めに「世に勝つ者」と現在形で書かれてあること、世に対する勝利の話です。これは今も私たちの間で続いている戦いです。日常生活の話をするのです。あなたは神の愛をいただくことによって、神のみことばに従って生きていくことが可能になりました。この「世」は何をするかということ、そのような歩みをしないようにと妨げるといことです。かつての生き方を継続していくように世はあなたに働き、そして誘惑をする。この「世」というのはあなたが神のみことばに従って生きるのを妨げるものです。Iヨハネ2：15にヨハネはこの世に関してこのようにメッセージを与えています。「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」、ヨハネが言ったように、神を愛するのか世を愛するのかどちらかだと言うのです。もしあなたが世を愛しているのなら、あなたのうちに神に対する愛はないと。なぜなら世を愛しているということはサタンを愛することになるからです。ヤコブはヤコブ4：4で「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と言います。もし私たちがこの世を愛する

のならそれは神に敵対することであると。Iヨハネ5：19には「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。」と。「世」を支配しているのはサタンです。この世の中のさまざまな流行とか、今私たちが目にするもの、テレビの番組かもしれないし、映画かもしれない。雑誌にしても本にしても、一体その背後にだれがいるかです。こういったものが一体私たちにどういう生き方を勧めているかです。神を愛するようには勧めません。神に逆らうようにと私たちに誘惑していきます。この背後にいるのがだれかはもう明らかです。ですから私たちがこの地上にある間、毎日の生活において当然神が要求されるのは、この世を愛するのではなくて神を愛して神に従いなさい、それができるのだということです。

続けてIヨハネ2：16を見ると、「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出た」サタンがもたらしていると言うのです。

#### ・「肉の欲」

自分の罪深い願いであったり、肉が欲する道徳的に正しくないような願いです。バークレーはこう言います。「神の戒め、審判、神の基準、神の存在をも忘れ無視する」、「肉の欲」というのはそういうものだ。神のことは忘れて自分の肉が欲するよう好きに生きていったらいいと。まさにそれが「肉の欲」です。

#### ・「目の欲」

実際この目で見て何か誘惑を受けるのです。これは周りのいろいろなものを欲しがるという性質です。バークレーはおもしろいことを言っています。「幸福は金銭で買える目先のものの中に発見できると思ひ込む」ことであると。我々が見た時にああいうものを手にしたらとか、こういう生活ができたらとか、これが自分の物になればきっと私はもっと満足するだろう、もっと幸せになるだろうと。「目の欲」です。本当の幸せは物からは来ません。環境からも来ません。神から来るのです。我々はそのことを知っているのです。でもサタンはそうして周りで楽しくやっている人たちを見せて神様、神様とあなたは言うて従っているけれども、見てごらん？そうでない人も楽しそうではないか、ひよっとしたらあなたは神様、神様と言いながら何か大切なものを見落としているかもしれないと。

#### ・「暮らし向きの自慢」

特にここで言われているのは、見栄を張った生き方です。空しいものを誇っている生き方です。自分が持っているものを自慢したり得意になってみたり。モーリスという神学者はバークレーからの引用として「会う人すべてに自分がさも重要な人物であるかのように思わせようとする」人だと言っています。例えばこの世のいろいろなものを見せて自慢したって一体何になります？この世の物が私たちに本当の幸せをくれたり、永遠のいのちをくれるのだったら自慢すべきです。でも私たちに罪の赦しを下さり、永遠のいのちを下さしたのは主イエス・キリストだけです。ですから私たちが誇りとするのはただ一つ、この神であると。

ガラテヤ6：14「私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあっては」ならない。なぜそう言ったか——。この十字架によって私に一番必要な罪の赦しを得たからです。この十字架によって生まれ変わったからです。私たちが誇りとするのはこれまで私たちが持ってきたものでないし、この世の人々が自慢し合っているものでもない。我々が自慢すべきことはこんな罪人を救ってくださったこの神を私たちは自慢するのです。だから神のみこころに従っていきたくとする新しく生まれ変わったあなたと、かつての生き方に、世を愛して歩いていくようにと引っ張っていく、そのような誘惑が存在していると。でも私たちがこの世に対して勝利したのです。これまでは無理でした。世は私たちを捕らえていました。でも救いによってその虜であった我々が、奴隷の状態にあった私たちがこの世から解放されて自由になり、そして私たちは世に従い続ける者が、そのような生き方をしてきた者たちが今度は神のみこころに従って生きる者へと変わったのです。だから私たちは神のみことばを学び、神の助けをいただきながらそれに従っていこうとするのです。神がお喜びになることを考えてそれを選択して行っていくことによって、神は私たちを変えて行ってくださる。私たちを成長させていってください。それによってますます何が神の前に正しいのか、何が喜ばれることなのか判断することができるようになっていく。そうして我々は世に対しての勝利を実生活で経験して行くのです。

信仰者の皆さん、私たちは世に打ち勝ったのです。世に対して白旗を揚げなければいけなかったこれまでの歩みから私たちは変えられたのです。私たちは神の力によって、助けによって新しい生き方をすることができると。その歩みによってこの神のすばらしさを私たちは世に証していくのです。世に勝利したのなら、勝利者らしく生きなさいと、神は私たちにそう命じておられます。神様の助けをいただきながらそのように歩いていきましょう。それが神がお喜びになること、それが私たちに望んでおられることです。